

# 平成30年度第2回岐阜県農業農村整備委員会

## 議事要旨

### 1 日時

平成31年3月6日（水） 13:30～16:30

### 2 場所

OKBふれあい会館6階 6-4会議室

### 3 出席者

別紙のとおり

### 4 議題

- (1) ぎふ水土里のプロジェクトについて
- (2) 平成31年度ふるさと水と土指導員の活動助成について

### 5 議事要旨

#### 【ぎふ水土里のプロジェクトについて】

(平成30年度実績)

- ぎふ水土里の展示会の今年度参加人数が昨年度と比較してずいぶん減っているが、理由はあるのか。(森委員)
  - 展示会の開催場所には市役所のロビー等があるが、昨年度の報告数値には、かなりの推定人数が含まれていた。今年度も市役所のロビーでの数日間の展示を行っているが、推定人数を報告するのは良くないと判断し、計上していないためである。それを加味すれば昨年度とは大きく変わらないものと考えている。(総山係長)
- 展示会参加者の感想の抜粋が記載されているが、中には検討しておくべき内容も含まれているものと思われる。参加された方々のご意見はしっかりと取り込んで進めていただきたい。(森委員)
- 「田ケロー」には様々なバージョンがあるのか。(森委員)
  - 岐阜県土地改良事業団体連合会が作っているカエルのキャラクターで、笑っているバージョン、困っているバージョン等がある。その他にもオタマジ

ヤクシのキャラクターもある。(川島技術主査)

→ 環境教育のきっかけづくりとして、子供たちへの周知啓発には大変有効で、とても大切だと思う。(森委員)

○ 「学ぶ」ための取り組みについて、何を学ぶのかということは明確化されているのか。委員長の話にもあったが、農村が見えなくなっている、農業というものが我々の意識から離れてしまっている事態をいかに可視化するかが必要。そのために岐阜県らしさを発現の一環として、例えば岐阜県版農村環境プログラムといったようなものは詰められているのか。(森委員)

→ 今日ご説明させていただいている内容は、農村が持つ多面的機能というのが、いかに都市等に恩恵を与えているのかということをしかり知っていただき、農村を守っていく礎になってほしいということをやっているのが大きく、委員ご指摘のような、岐阜県オリジナルとしてやっているというものにはなっていない。ただし、岐阜県ならではというものには、例えば、先般世界かんがい施設遺産に登録された曾代用水があるが、水路そのものとしては他の水路とすごく変わっているというものではないが、そのバックボーンである、この水路が完成するに至るまでのどれだけの苦労があって、地域ならではの取り組みがあって、だから今でもこのように水路が活用されているということ学ぶ材料としたものもある。デジタルアーカイブ事業で掲載したいと考えている素材は、見た目に華が無くても、歴史的背景が濃密なものは学ぶ材料として活用していきたいといった考えでやっている。そういった面では、これは県の地域オリジナルである。(近澤係長)

○ 水田魚道の取り組みは研究に基づき非常に優れており、他の県ではここまでのレベルではほとんどやっていないと思う。これは岐阜県の大きな目玉商品になり、大変優れた農政部の成果の一つと評価する。(森委員)

○ ため池の外来種駆除について、駆除した外来種の中にコクチバスがいるが、よく注視しておいていただきたい。コクチバスは遊泳力が強く、オクチバス以上に魚食性が高いということが分かっている。福島県の阿武隈川の例であるが、流れが比較的速いところでも鮎と一緒に泳いでいるといった事例がある。ため池での確認は下流にも流出していることも想定される。この郷戸池というのは何川水系になるのか。(森委員)

→ 木曾川水系である。(大塚主任技師)

→ 万が一、長良川の方でコクチバスが出てしまうと、あっという間に上流に

も広がりかねない。注意が必要。(森委員)

- 確認だが、魚を駆除してかわいそうといったような意見は出ていないか。(森委員)
  - 地域の方と一緒に取組んでいるが、そのような意見は聞いていない。(大塚主任技師)
  - 駆除後の効果はどうか。(松本委員長)
  - 地元や市役所の方々に聞いたところ、ウシガエルは足があるのでまた発生している。また、魚影があったとの報告のみであるが、どうしても取りきれなくて生き残ったものが再び成長しているという池もある。(大塚主任技師)
- 「ぎふ田んぼの学校活動事業」について、参加者の感想にいいことが書いてある一方、課題も含まれている。解決できそうなものもあるため、是非フォローアップし、続けていっていただきたい。(安藤委員)
- 私どもの高山地域にはため池は無いが、全国を視察して歩いていると、ため池依存の水田は非常に多い。おそらくであるが、水自体に酸素が少ないのか、気温の関係か、ため池の水を使っている水田には藻が張っている。そうすると中干しをやると藻が稲に張り付き倒れてしまい、重要な障害となっている。是非これを改善することを研究してほしい。(和仁委員)
- 「若い力で元気創出ふるさと支援事業」について、1年契約ということかもしれないが、1年間で終わってしまったのはせつかくの縁が水の泡になってしまう。ただ、困っているのはこの地域だけではないこともあるので、活動団体を増やすことや、審査の条件として少なくとも5年続けるとか、そういった一定の期間を設けてはどうかと思うがどうか。(澤野委員)
  - 本事業は多くの大学に参加していただきたいということもあり、要綱では3年間を期間としている。ただし、地域と企業がパートナーシップを結ぶことでより農村の活性化を図ろうという「ぎふ一村一企業パートナーシップ制度」というものがあり、本制度に大学が登録していただくことで、引き続き継続して本事業に申し込むことができるようにしている。(近澤係長)
- 「ぎふの棚田魅力体感バス事業」について、参加費は無料となっているのか。(中田委員)
  - バスの運行代金や企画に係る代金は県が支出しているが、食事代や体験料金については、参加者に負担していただいている。(川島技術主査)
  - 参加者の感想が「ぎふの田舎応援隊への参加は難しい」「労働力の確保が

必要と思う」など、魅力を体感するツアーの感想としては属性が良くわからないものとなっているがなぜか。また、ターゲットは県外からの魅力体感者を増やすことや、田舎応援隊登録者の県外登録者を増やすことを狙っているのか。(中田委員)

→ 田舎応援隊を増やすためのPRや、棚田の現状の課題などを理解していただくことも狙いとしているため、そのことをバスの中で説明させていただいている。それもあって、このようなお答えをしていただけたものである。(近澤係長)

→ 受入れ側の棚田が何につなげていきたいのかということも考えながら実施されるとよい。(中田委員)

○ 私の会社も「ぎふ一村一企業パートナーシップ」に登録している。貝原棚田に春と秋に社員を連れて行っているが、いつもならば県の方でのぼりをいっぱい立ててにぎやかになっているが、この写真には何も立っていない。この人たちは貝原棚田のどこに行って何を見ているのか。また、体験内容の餅つきや薬膳料理の昼食は魅力的なのか疑問。貝原にはもっと素晴らしい場所がある。もっと魅力的な部分をお見せしてほしい。このツアーはどのように広報されたのか。(佐竹委員)

→ 旅行業者に委託をしており、旅行業者のホームページやラジオ番組でのPRを行った。企画にあたっては、貝原棚田の保存会や揖斐川町役場、かすがモリモリ村の方々と打合せをしたところ、貝原の魅力は薬草だということになり、これを体感していただくのが良いということになった。(川島技術主査)

→ モリモリ村には温泉もあるが、なぜ入らないのか。(佐竹委員)

→ 昼食やハーブ講座はモリモリ村で実施したため、昼食の後の空き時間に実費で温泉に入られた方も何名かお見えになった。(川島技術主査)

→ 与えられたことだけを体験するのではなく、たとえばワラビ取りを体験するなど、自分たちでその自然を体感する企画をしてほしい。また、ここには上の方に行くと素晴らしい光景もある。(佐竹委員)

→ 写真には写っていないが、一番上まで歩いて行って、トウキの生えているところや炭焼き小屋も見いただいている。(川島技術主査)

→ 反省すべき点は、本当はもっと早い時期に実施したかったが、調整に時間を要し、開催が現地に何もなくなってきてしまっている11月になって

しまったこと。来年は改善すべきところであると考えている。(近澤係長)

→ 田舎応援隊の活動時期とも合わせた方がよい。(松本委員長)

→ ここにしかいない生き物がいる。都会から来たら必ず喜ぶ。そういう場所を見つけてツアーで連れていく。そうすれば毎年見に来たい、お手伝いしたい、そういう気持ちになると思う。(佐竹委員)

○ 「若い力で元気創出ふるさと支援事業」について、募集は3団体で、今年度取り組まれた岐阜大学や岐阜聖徳学院大学が来年度再び取り組まれるかは現時点では不明とのことであるが、なるべく多くの大学に参加していただけるよう募集していただきたい。(安藤委員)

→ 田舎応援隊に登録されている若い人たちをターゲットにしてやっていただけるとよいのではないか。組織である必要はあるのか。また、大学である必要はあるのか。(松本委員長)

→ 要綱では、事業の実施主体は「大学、短期大学、専門学校に在籍する学生及びその学校の教員で構成する団体」としている。(近澤係長)

→ 期間は3年とのことであるが、学生はどんどん変わっていくので、固定の大学でもよいのではないか。(西脇委員)

→ 4年でもいいのではないか。(安藤委員)

→ 4年続けてやっていくと方向性が見えてくる。1年生は大学で何を学ぼうかぼんやりしているが、例えば種蔵棚田に4年間通えばすごく社会性が身につくと思う。今後岐阜県に就職していただければ財産にもなる。検討していただきたい。(西脇委員)

○ 「若い力で元気創出ふるさと支援事業」を実施することで、地元の反応はどうか。(森委員)

→ 岐阜大学は種蔵棚田と10年近いお付き合いをされており、地元は来ていただいてありがたいと言っている。(徳川技術主査)

○ 県にはミナモというキャラクターがいるが、ミナモに麦わら帽子をかぶせて稲わらを持たせるとよいのではないか。啓発周知において効果的な手立てを検討することも重要。(森委員)

→ 農業ミナモもあり、コンバインを運転しているものもある。(近澤係長)

### (平成31年度計画)

- 基本的に本年とどこが違うのか説明してほしい。(松本委員長)
  - 基本的には同じであるが、同じことをやるにしても、インバウンド対策など、少し目線を変えた組み立てをしているものがある。(近澤係長)
  - 来年度のテーマである「新たな世代につなぐ」を明確にする取り組みを力説していただけるとよかった。後は縦糸と横糸をどのように組み合わせていくのかというところ。これをつないでいくのが県の仕事。(松本委員長)
- 田舎応援隊のターゲットが絞られているのは良いが、更に絞ってもよいのではと思う。インバウンド対策を実施するのであれば対象は欧米なのかアジアなのか、ガイドマップを作るのなら英語版が必要なのか中国語版が必要なのか、応援隊は県内の人なのか県外の人なのか、そこまで考えておくとよい。(中田委員)
- インバウンドツアーについて、食べるものが例えばインドネシアだとほぼイスラム教徒になるため、豚肉やお酒はダメ、調味料のみりんもダメになる。非常に厳しい。こんなところに手を付けて大丈夫なのか心配である。(西脇委員)
  - 今年度、基金事業ではない別事業で、岐阜大学の留学生の方を柵田に連れて行き、試験的にインバウンドモニターツアーを実施したところである。参加者は中国、インド、インドネシア、ドイツなど、出身国が様々な方々で、中には委員がおっしゃるとおり、食べ物に制限がある方が何名かおみえになった。ただし、今回の場合は対象が留学生であったことから、事前にリサーチができていたため、食事の対応は可能であった。来年度の取り組みにあたっては、田舎に興味があるのはアジア系ではなく欧米系というような話も聞いたことがあるため、個人的にはであるが、現時点では、まずはそういうところをターゲットにしていくことを考えている。(近澤係長)
  - 欧米系だとバスツアーで来ることはまずなく、個人旅行が多いため、検討が必要である。(西脇委員)
  - 最終的には農泊やグリーン・ツーリズムに繋げていきたいと考えている。(深谷課長)
  - 農家民泊を増やすというのはすごくいいこと。市場がものすごく広がるが、農政だけでなく様々なところと連携していく必要がある。(西脇委員)
- インバウンドも大切であるが、外国人に働き手としてのPRをするツアー

はあるのか。(澤野委員)

→ まだそこまでは考えていない。(近澤係長)

→ 棚田地域での働き手となると、年間を通しての収入はなかなか無い。それをどのようにフォローしていけるのかを考えていく必要がある。(松本委員長)

○ 「棚田地域収益向上支援事業」について、期待される効果が具体的に記載されているが、本当にこれが実現するのか。棚田で収入を増やす仕組みを作るのであれば、その地の特産品に特化したものを作るとかしたほうが良いのではないか。クラウドファンディングや棚田カフェといっても、そもそもそこに人がいない。もう少し検討するとよい。(佐竹委員)

→ 中山間地域直接支払でもそのような趣旨があったと思うが、なかなか実現していない。どういうものが売れるのか、これから検討していかねばならない。首都近郊の農園などには都内から人が移り住んで、棚田カフェをやっているような事例はあるが、多くは周りとの関連性を無視して棚田なら棚田だけを取り上げている。繋いでいかねばならない。(松本委員長)

→ 棚田地域の「地域」のエリアは、どのように考えているのか。(中田委員)

→ 制度設計をこれからやる場所であるが、委員がおっしゃるとおり、棚田単独でやっても地域の盛り上がりには繋がらない。棚田を核として、周りも巻き込こんだ形がベストである。本事業で核となる棚田の売りを企画し、その後、それをどう活用していくか、市町村とも相談しながら広げていきたい。(近澤係長)

→ 国は、グリーン・ツーリズムが年配者の生きがいややりがい終わらないようにしようということで農泊になり、所得向上までという目標をつけているが、これもそこを目指すとよい。(中田委員)

○ 中山間地に住み、いろいろ体験している者の意見として、収益を上げてここで若い人たちが生活していけるような事業は無理だと思う。こういう事業を実施し、失敗事例も得てほしい。都会から来た人が収益を上げ、成功しているように見える事例も多々あるが、実は年金生活者で雑収入が多くある、そういう人が楽しみながらやっていて羨ましく思われる方もみえるが、若い人がやると失敗する。(和仁委員)

→ きれいごとではいけない。努力し、繋いで行っていただきたい。(松本委員長)

- 模索をしているところ。移住定住、グリーン・ツーリズム、多面的機能支払など様々な手法の中で農村地域にお金が落ちる仕組み、そこで暮らしができる仕組みを考えていかねばならない。その中の一つの検討として予算を組んだところである。(深谷課長)
- いろいろなものを組み合わせることが大切である。(和仁委員)
- 「荒廃農地等利活用促進事業」について、「(2) 再生利用活動タイプ」に記載されている「1号遊休農地」とは具体的にどのようなものか。(和仁委員)
  - 農業委員会にて現場を調査した結果、再生をすれば荒廃農地ではなく耕作した農地になるだろうと分類されたものである。こういうところに支援をさせていただく。(総山係長)
  - 「(1) 不作付け解消活動タイプ」に記載されている「不作付け農地」というのは完全に再生ができるというものか。(和仁委員)
  - 作付けをされない自己保全というところを、戦略的な作物に移行させたいというものである。(総山係長)
  - (2)について、例えば市の補助事業で耕作放棄地を解消し、再生したが、その後、土壌改良だけに本制度を使うことは可能か。(和仁委員)
  - 現在制度設計をしているところではあるが、市町村にも負担していただく事業となっているため、一緒にやっていただければ可能である。(総山係長)
  - これは稲作でなくてはならないのか。(西脇委員)
  - 稲作には限らなくてもよい。(総山係長)
- 岐阜県は水田は現状維持の方針なのか。それとも増やしていきたいのか、減らしていくのか。(西脇委員)
  - 日本人の米を食べる総量は減ってきている。しかし、国から生産数量の目標が示されていた数年前であっても既にそれを下回る水準でしか米は作られていなかった。それが意味常態化してしまっており、かつて国が作っていたいいと言っていた水準までは作って欲しいと言いたいのは確かである。また、人間が食べる以外の用途の米であるとか、麦大豆などにもそれなりに助成金が乗っているため、田そのものは減らすわけにはいかないということもある。農家の経営もあるため、その上で何を作っていくのか、当然売れるものを作っていくかなければならない。二百万県民が平均50キロ食べるとしても10万トンで作ってしかるべき数量であり、減らしていくとは考えていない。(大西次長)



- 「荒廃農地等利活用促進事業」について、多面的機能支払の団体が市から耕作放棄地の解消をしてくれと言われたが、多面でやると1回で1000円ぐらいの日当がやっとな。多面の団体は本事業を活用できるのか。(波能委員)
  - 多面の活動エリアは、多面の活動でやるということになる。(今瀬係長)
  - 耕作をしていただくのが前提にあるため、多面の組織が耕作できるのかということになる。本事業は耕作者が対象となり、制度的には本事業の活用は難しい。(深谷課長)
  - 草が繁茂していることで種が飛んできて周りに迷惑になる、水路が詰まってしまうなど問題になっている。誰が解消するのかということになる。(波能委員)
  - 農地を持っている方々が組織を作ればいい。(松本委員長)
  - 不在地主の方から借りて、集落営農組織を立ち上げてやる等も必要。(深谷課長)
  - 集落営農組織は法人格でなくてもよいのか。(波能委員)
  - 大丈夫である。中間管理事業を使えば、不在地主の調査を簡素化できる制度もある。相談願いたい。(深谷課長)

#### 【平成30年度ふるさと水と土指導員活動助成】

- 新規の方の中には以前活動されていたことがある方もおられると思うが、本当に初めての方はどれほどおみえになるのか。(安藤委員)
  - 4名である。(川島技術主査)
- 新規の1番の方の活動対象が500名とあるが、どういうことか。(森委員)
  - 地域全体や近隣の小学生を対象としているためであり、500名で活動をするということではない。(川島技術主査)
- 2番目の方のベリー栽培というのは、収益は無いのか。(佐竹委員)
  - 目的は、地域活性化や、地元の小学生や地域の方々に郡上地域でもブルーベリーの栽培が可能であることを体験学習を通じて知ってもらおうというものであり、収益は無い。(相原主任技師)
  - 将来的には販売を目指して試験的にやってみるといった動きは無いのか。(松本委員長)
  - 将来的にはこの事業を3年間実施した後、6次産業化も視野に入れてやっている。(相原主任技師)

- 多くの方が消耗品費ばかりを要求されているが、内訳はしっかり精査されているのか。(安藤委員)
  - 詳細はしっかりとある。消耗品以外は自己負担でやり、一番多く使う消耗品を要求している。(相原主任技師)
  - 市からの援助は無いのか。(松本委員長)
  - 市がやる気があれば可能である。(大西次長)
- 皆、上限いっぱい要求されているということか。(西脇委員)
  - このお金を直接指導員の方々にお渡しするのではなく、消耗品などを県で購入し、それをお渡しするという形になっている。また、最終的には要求額すべてではなく、実績に応じた支出となる。(川島技術主査)
  - 現物支給であり、農林事務所の方が購入し指導員に渡すということをしているため、例えばペットボトル5本のみであっても、県のかたにわざわざ持ってきていただいている。費用対効果として疑問。機会があれば無駄なことは極力減らしていくように見直していただきたい。(和仁委員)
  - この制度は20年以上実施しているものであり、例えば指導員に日当を払ってもよいと思うが、そのような項目が無く、必要なものは現物支給しますという、がんじがらめの世界で動いている制度であるため、なかなか動けない。(松本委員長)
- 平成30年度ふるさと水と土指導員活動助成について、承認するということがよいか。(松本委員長)
  - 異議無し。(各委員)

## 平成30年度 第2回岐阜県農業農村整備委員会出席者名簿

### □委員10名

(50音順)

氏名	主な職名	備考
安藤 重治	岐阜県稲作経営者会議 青年部顧問 アグリード株式会社 代表取締役	
佐竹 輝美	株式会社デリカスイト 執行役員情報本部長	
澤野 都	岐阜新聞社編集局 生活文化部長	
中田 誠志	合同会社地域と協力の向こう側 代表	
西脇 洋恵	NPO法人 ななしんぼ 理事長	
波能 寿子	各務用水土地改良区 事務局長	
林 喜美子	生活協同組合コープぎふ 理事	
松本 康夫	岐阜大学 名誉教授	
森 誠一	岐阜経済大学経済学部 教授	
和仁 松男	岐阜県農業参入法人連絡協議会 会長 株式会社和仁農園 代表取締役	

### ■関係者等 18名

氏名	所属・役職	備考
大西 正晃	農政部次長	
深谷 勝之	農村振興課長	
近澤 義隆	農村振興課 農村企画係 係長	
総山 富彦	農村振興課 農村支援係 係長	
川島 久美子	農村振興課 農村企画係 技術主査	
今瀬 誠司	農村振興課 農村支援係 技術課長補佐兼係長	
成毛 友哉	農村振興課 農村支援係 技師	
大塚 洋充	農地整備課 農地防災係 主任技師	
國井 晃子	岐阜農林事務所 農地整備課 計画調整係 技術主査	
日比 正夫	西濃農林事務所 農地整備課 計画調整係 係長	
左高 智彦	揖斐農林事務所 農地整備課 計画調整係 技術主査	
寺口 哲哉	中濃農林事務所 農業振興課 農地整備係 技術主査	
相原 亜希子	郡上農林事務所 農地整備課 計画調整係 主任技師	
岩崎 美由貴	可茂農林事務所 農地整備課 計画調整係 技術主査	
山田 孝之	東濃農林事務所 農業振興課 農地整備係 技術主査	
小栗 雅也	恵那農林事務所 農地整備課 計画調整係 技師	
亀山 剛	下呂農林事務所 農地整備課 計画調整係 主任技師	
徳川 隆之	飛騨農林事務所 農地整備課 計画調整係 技術主査	

